誤つた画の指導法

創造させることに重点を

画記（七）

「絵や図をかいたり、感性を創案したり、物を作つたりするような造形的創造活動を通して、生活経験を蓄積にし、自己の興味、適性、能力などをできるだけ発達させる」とか「言語では表現できない思想や感情を、表現する手段としての初歩的な技能を得させる」とか「創造的表現活動を、情緒の安定のために役だてる」とかいつた工合で、いわば戦前は一年はこんな風に三年はこんな風にさせるというぐあいに手本を作つて外から合理的に当てはめていくやり方であつたのが、戦後は児童一人一人の心理に応じて、児童の心の中にある智能や感情を内部からひつぱり出して創造させるという方式であつて、ではどうすればよいかというので多くの指導者がいろいろな研究をしているのである。

人まねでは駄目

手本にしても、児童の描いた画を印刷してあるのが普通であつて戦前のような大人の画家の描いた画は鑑賞用に少しばかり入れてあるくらいなものであり、戦前の手本のような画を児童が描いているならば、それは全然大人の画のマネであつて、児童の心の中の智能や感情が創造的に湧き出したものとは大ちがいであるといつて差支えない。もしもそんな画を描かせたり入選させたりするような指導者があるならば、それは図画教育について何も研究していない人であるといつても間違いはないであろう。現在発行されている図工の手本の中の児童画をよく見ればこのことはすぐに理解できることである。なお、この問題については下学年や中学年、上学年に分けてボツボツと筆を進めてみたいと考えている。＝家永勝之亮（教育研究所嘱托・土曜会）

松屋で「描かせたい画、描かせたくない画」というテーマで児童画展を開いたが、それについて種々な問題がおこつているようである。なぜ手本のように描いた画が良くないか、という問題が多いようである。こんな人は主に戦前の手本を頭に置いているように思われる。あのころは有名な画家に手本を描かしていたので、子供の画とは全然質が違つていた。文部省の示した図画教育の目的も「図画は普通のものの形を描くことができるような能力を養い、あわせて美的な情操を養う」というのであつた。ところが戦後、昭和二十六年に決定した小学校学習指導要領の図画工作科編には、とても変つたことがたくさん示してあるが、そのホンの一部分を拾つてみてもつぎのような具合である。

戦前と戦後の違い

昔ばなし

豆の木

むかし、あるところに、早おきの好きなじいさんとばあさんがいました。ふたりはまだうすぐらいうちにおきて、のらにでるしたくをしていました。

そのときふたりのあいだへ、あたまぐらいの大きさのものが、ごろごろところがりだしてきましたはて何だろうと、じいさんとばあさんはこごしをかがめてひろいあげました。それはなんと大きな豆でした。いままでこんな大きな豆は、見たことも聞いたこともなかつたので、村のひとたちは大ぜいけんぶつにきました。

その高名じいさんは、たねにしようといいました。ばあさんはいつてたべようといいました。けれどもじいさんは、ばあさんがお寺まいりにいつたるすに、こつそり前のはたけのすみにまいておきました。

いくにちかたちますと、大きな白い芽がでてきました。それがだんだんのびて二丈にも三丈にもなりました。そのうちに枝がのびて青い葉がでてきました。やがて根元は家のもみの木よりもつと大きな豆の木になりました。こずえはずつと雲の上までのびて、かすんで見えなくなりました。

秋になるとたくさんの豆がなりそのさやが風にゆれてかみなりのようにあたりにひびきました。じいさんは家にあるいちばん長いはしごに、もう一つみじかいはしごをつないでやつと豆の木にのぼりさやをもぎはじめました。ばあさんはむしろをしいて、その上に干しました。じいさんはだんだん上にのぼつていきました。下をみるとばあさんはありのように見えていました。そうしてとうとう雲の上にでました。雲の上をみると、かみなりがたいこをかついでひるねをしていました。じいさんはびつくりしてにげおりようとするとかみなりが目をさまし

「よいところにきた、風のかみがねこんでいるもんだから、あいぼうがなくて困つている。下界では雨がふらないで困つている」といいました。

「はいはい、ひやくしようは長いこと雨がふらないので困つています」とじいさんはあたまをぺこぺこさげていいました。

かみなりは水のいつぱいはいつたておけと、小さなはねぼうきをもつてきました。

「おれがごろごろたいこをたたくから、じいさんはこのはねぼうきで水をたらしてくれ。久しぶりの雨でひやくしようもよろこぶだろう」といつてかみなりは、かるくたいこをたたきました。じいさんはそのたいこにあわせて、ておけの水をまきました。すると下界ではざあざあと大雨がふりだしました。そこでばあさんはどうしているだろうと、雲のさけめから下をのぞきました。ばあさんは、豆を干したむしろをあわてて家の中に運んでいました。ところがうらのはたけをみると、長い日でりで地めんはすつかり干され、さといものはばあかくなりかけていました。

「こりやたいへんだ」

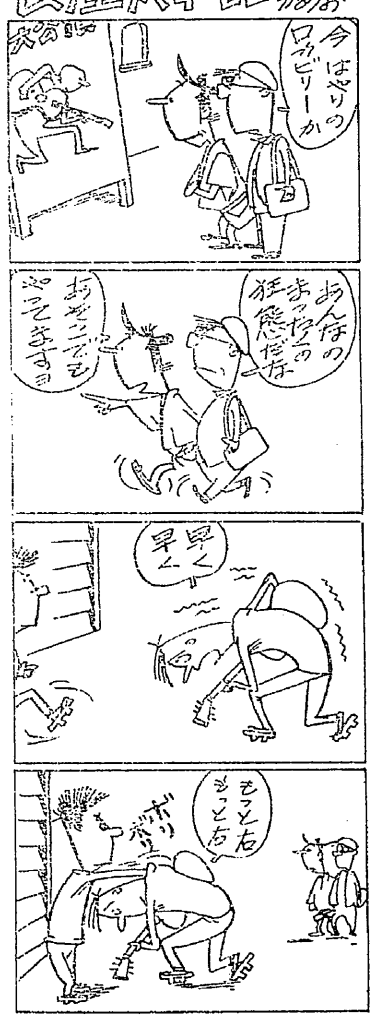
とじいさんは、かみなりのいいつけを忘れて、ておけの水を半分ばかりいちどにおとしました。するとさあたいへん、下界は大雨になり、大水がでて家も木もながれだしました。じいさんの家のあたりも、にごつた水がうずまいています。

「ああ、家がながれてきた。こんどは大きな木がながれてきた。家の屋根にぶつかつてしまつた。おらのばあさんがしがみついている。ああ、ばあさんがおぼれる、だれかきて、おらとこのばあさんをたすけてくれ」

じいさんは、おもわず大きなこえでさけびました。

じいさんがあまり大きな声でさけんだものですから、庭で豆を干していたばあさんが、かけてきてゆりおこしました。じいさんはあくびをして、きよとんとしていました。

【あとがき】　このお話は新潟県地方につたわるものですが、西洋のおとぎばなし「ジャツクと豆の木」とじつによくにています。二つの物語りをくらべながらお子さんによんであげて下さい。



【豆解説】

職業訓練法

政府が今国会に提出した重要な労働法案の一つに「職業訓練法案」というのがある。

これはいままで職業安定所でやつていた職業補導と、労働基準局でやつていた技能者養成を一本にし全国一系統で職業訓練所をつくるというものだ。この目的はいままでの失業対策と、さいきん大企業で問題になつてきた技術労働力の不足とを、一石二鳥に解決しようとするのだといわれる。しかしその内容を一言でいうと、いままでの失業者のための職業補導を犠牲にして大企業のための技術者養成を国費を使つてやろうということになるだろう。

この技能者養成には同時に生産性向上運動のための監督者訓練（TWIやMTPなど）が抱きあわされていて、技術を学ぼうとすれば生産性向上運動の思想教育もうける仕組みになつている。またこの法律では、技術の国家検定制度を実施しようともしている。つまり「職業訓練法案」は企業の生産性を高め、企業に都合よくあてはまる人間をつくりだすことを本年の目的とした法案といえるだろう。

【主婦メモ】

玉子の季節

三月末ごろからは一年中で一ばん玉子の安いとき。お惣菜にせいぜい使いたいものです。毎日同じものでは飽につきます。目玉焼の次は親子どんぶり、その次はゆで玉子をみじん切りしてから丸めたコロツケ、厚焼玉、スコツチエツグなどと料理法の工夫をお忘れなく

福壽院吟行

小原 青々子 選

六本の六種のつつじ苗植うる　中野春雄子

早春の光りの中の仏たち　猛渡 草光

井上十三夫

鐘楼の桜芽吹きにかこまれて　加藤 香月

十人の遍路杖とて束ねあり　永野 草平

野火あとのものの萌えいて陽炎へり　荒金 久平

万年青活け白楽天の詩の軸　山本 菫天

わび助の一そう赤し門褄へ

映画短信

水爆実験への怒りを映画に

記録映画〝世界は恐怖する〟を作つたドキュメント・フイルムではこんど太平洋での水爆実験で漁物をうばわれる中小マグロ漁者の生態をカメラでまとめた。題して〝荒海に生きる〟。映画は父を海で失い高校をでてはじめて炊事見習として船にのりこんだ十九才の島作という少年に焦点をあわせ、漁民のいきどおりやなげきを亀井文夫がまとめたもの。（三巻）

日・鮮親善映画 民芸の手で完成

民芸自主作品の「オモニと少年」がこのほど完成した。オモニとは朝鮮語で〝おばさん〟という意味だが、常磐炭田に実際にあつた話からヒントをえて作つた日鮮親善の映画だ。

父と死別した一郎は隣の朝鮮人のおばさんに引きとられた。朝鮮人の仲間はオモニが一郎を育てることにみんな反対する。オモニはあきらめず、クズ屋をしながら一郎を大事に育てる。彼女にはこの少年が、死んだ子供が生きかえつたとしか思えないのだ。一方一郎は小学校の仲間から「にんにく臭いぞ！朝鮮人！」とからかわれる。伯父さんに引取られる話もでる。しかし少年はオモニの愛情にいだかれてすこやかに暮らす。監督森田忠、北林谷栄、内藤武敏、手塚史らが主演。

「ぶつつけ本番」 フランキーの主演で

カメラの鬼だつた故松本久翔カメラマンをモデルにした「ぶつつけ本番」は佐伯清三監督の下に準備が進められていたが、このほど配役がきまつた。松本カメラマンにフランキー堺、その夫人淡路恵子

＝今週の映画＝

☆大井田名画座（2―8）千の顔を持つ男、広場の天使

☆セントラル（2―8）日の当る島、素適な気持

★グランド（1―11）母、赤胴三ツ目の鳥人

☆太陽館（2―8）続社長三代記おとらさんのホームラン

☆大天地（2―8）蛍火、美しき不良少女

☆中央映劇（2―8）丹下左膳、台風息子（二部）

★銀星（31―3）リリー、三つの恋の物語

☆金映（2―8）蛍火、坊ちやんの野球王

☆宝星（2―5）張込み、続青い山脈

映画

すぐれた山の描写「氷壁」

魚津恭太（菅原謙二）と小坂乙彦（川崎敬三）は一月一日の明け方前穂高の北壁にしがみついて、吹雪と闘つていた。あと十米程で岩場がつきるというとき、猛然と谷間から雪が吹きあげ二人を結びつけていたナイロン・ザイルが切れ小坂の体は転落して行つた。

〝コ、サ、カ〟魚津の絶叫は虚しく煙の海の中に消えた。どうしてザイルが切れたのか――。

人妻である八代美那子（山本富士子）を忘れようとして山にいどんでの結果だつた。ナイロン・ザイルがほんとうに切れたのかどうかをめぐつて、魚津は世間の注目を浴びる。問題になつたザイルは恭太がつとめている新東亜商事の兄弟会社の製品であつたため、恭太の立場はさらに苦境へと追いこまれた。ザイル製造会社の信用問題や美那子の夫敬之助による衝撃実験などもからんで、恭太は深い孤独感に襲われる。そうした渦の中から恭太は美那子にひかれて行く自分を知つた。

美那子の方でも恭太と会つているときには、夫や小坂と一緒のときと違つて何か体が上気するのを感じていた。ザイルの実験結果が判つた日、再び美那子に会つた恭太は「小坂は貴方に冬山の岩壁をみせたいといつていました。僕にもいまみせたい人がいる。それは貴女です」この瞬間は、同時に魚津にとつて美那子に再び会うまいという決意のときでもあつた。小坂の死体が発見されそれを焼いた夜、小坂の妹かおる（野添ひとみ）は恭太に求婚する。

恭太はかおるとの結婚するために美那子への思慕を清算しようと前穂高の単独登はんを試みる。だが、恭太の行手には凄いガスと雪崩が待つていた――。徳沢小屋では、明日会える恭太が登りつつある前穂高の峰をかおるが静かにみつめていたその峰の姿は無気味な肌色をみせて妙に明るい空にそそり立つていた。

井上靖の原作を若手の増村保造監督がドライなタツチでたたみかけていく。風もつかせぬ速いテンポが若い人たちには受けるだろう。なぜ山に登るのか、山がそこにあるからだ――ということばがある山につかれた男の山を愛する一途なことばだ。だがこの映画は（少なくともこの映画の中の登山は）ちようとちがう。「人妻を愛しているからだ」「それを忘れたいからだ」というわけである。現実逃避の手段として山が使われているだから映画の中の主人公たちはどこかあいまいで、それに比べて山の描写がすぐれて美しいのは皮肉だ。脚本新藤兼人。（十二日から グランドにて上映）

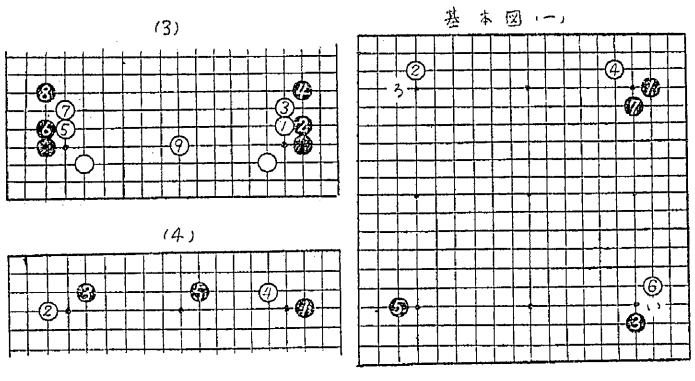
囲碁教室 (49)

秀策流の布石 1

前回は基本図（一）の黒1に対するいの並び小目でしたが、黒5に対するいのような向い小目でも、白から両隅のケイマにかかられると、やはり手抜きできない意味があります。

即ち(3)図のように白1、5と両ガケされて、白9と大きく構えられることになると白の模様があまりも大きく黒よくありません。

もつとも並び小目や向い小目が決して悪いというのではなくただ基本図（一）の黒1、3、5の配石では、白のカカリに対して手抜きしても、両ガケされて不利になるおそれがないというように過ぎません。

基本図（一）の白2はその一路下の星にも多く打たれますが秀策流は黒1、3、5が調子になるもので白の響点如何を問ません。然し黒1に対して白2でその向い小目に打つのは、(4)図のように、直ちに黒3とカカられて白不利とされています。即ち白4とケイマにカカると、黒5がヒラキとハサミを兼ねた絶好の大場になるのです。従つて白は黒1に対するカカリに制約を受ける事になります。

橋本 初義
境 敬一